未来を創る財団 Newsletter
Future + No. 9 Oct 2021
"A brighter future for the next generation"
The Outlook Foundation

「やさしい日本語」の普及のために　　フューチャー ＋ 第 9 号（要旨）

庵　功雄
一橋大学国際教育交流センター教授

外国人の受け入れが不可避であると考えられる最も大きな理由は日本の人口減少である。人口が減少することは、特に地方においては壊滅的な打撃となる可能性が高い。

「我々は労働力を呼んだが、やってきたのは人間だった」

というスイスの作家マックス・フリッシュのことばがある。

単に人道的に問題であるだけではない。タックスペイヤーを増やせなければ、いずれ日本の財政が危機的状態を迎えることは避けがたい。

外国人の受け入れは、30 年後の日本を「日本人」と「外国人」が共に作っていくという理念のもとに行う必要がある。

近未来の日本社会を目標とし、その実現のために必要な外国人受け入れ政策のうち、中心的な役割を担うのが「やさしい日本語」という概念である。

「やさしい日本語」の誕生

次の掲示は阪神淡路大震災のときに実際に使われたものだと言われている。

（1）容器をご持参の上、中央公園にご参集ください

母語に漢字を持たない非漢字圏の外国人、特に日本語能力がまだ初級レベル程度の人には、「中央公園」以外はおそらく理解できないと思われる。

次のようにルビをつけても難しさは変わらない。

（2）容器(ようき)をご持参(じさん)の上(うえ)、中央(ちゅうおう)公園(こうえん)にご参集(さんしゅう)ください

非漢字圏の人にもわかるようにするには、次のように言い換える必要がある。

(3) 入(い)れるものを持(も)って、中央(ちゅうおう)公園(こうえん)に来(き)てください。

「やさしい日本語」研究は、平時における外国人に対する情報提供の方策から出発したが、現在では次のようにその研究の射程を広げている。

1. マイノリティのための「やさしい日本語」（対象者は成人）
   a. 居場所作りのための「やさしい日本語」
      1. 初期日本語教育の公的保障の対象としての「やさしい日本語」
      2. 地域社会の共通言語としての「やさしい日本語」
      3. 地域型初級としての「やさしい日本語」
   b. バイパスとしての「やさしい日本語」（対象者は子ども）
      1. 外国にルーツを持つ子どもたちに対する日本語教育
      2. ろう児に対する日本語教育
2. マジョリティにとっての「やさしい日本語」

a. 日本語表現の鏡としての「やさしい日本語」
b. 日本語表現にとっての「やさしい日本語」

「やさしい日本語」が目指すもの

1）地域社会の共通言語としての「やさしい日本語」

定住外国人が増えるということは、地域社会に彼／彼女たちが生活するようになるということである。論理的に考えて、地域社会の共通言語が生まれるとすれば、それは、日本語母語話者が一定の調整を加えた日本語、すなわち、「やさしい日本語」しかあり得ないことになる。

2）日本語表現の鏡としての「やさしい日本語」

日本語母語話者にとって、日本語を用いて行う最も重要な言語活動は「自分（だけ）が知っていることを相手に伝えて、相手を自分の考えに同意させる」ことだと考えられる。

その１例として、自治会に入ってもらうというロールプレイを考える。

このロールプレイを成功させるためには、次のようなことが必要となる。

・自治会の内容を聞き手である外国人に伝える
・自治会に入ってもらえるように聞き手を説得する
・外国人からの次のような質問に適切に対応する
　・自治会に入ることは義務なのか
　・自治会に入ると、どんなメリットがあるのか
　・自治会に入らないと、どんなデメリットがあるのか
　・なぜ自治会費を払わなければならないのか

これらは同様のロールプレイを日本語母語話者同士で行った際には問題にならない。それは、これらが「暗黙の前提」になっているからだが、そうした「空気」を共有していない外国人相手だと、前提が崩れ、説明が求められ、ロールプレイの真正さが高まる。

「難しさへの信仰」

公的文書がやさしくならない理由の一つに、役所の文書は漢語を使って書かれていなければ「それらしくない」といった感覚「難しさへの信仰」が、受信側にもあるのではないかとの指摘がある。

外国人だけでなく日本人にとっても医療における患者に対する説明（インフォームド・コンセント）など、問題になることがある。

同様の問題は、法律に関わることばにも見られる。

これからの日本語表現を考える上で重要なのは「難しさへの信仰」を捨てることである。一般の日本語母語話者に求められるのは、小説を書く能力ではなく、自らの考えを筋道立てて読み手（聞き手）に伝えられる能力である。

日本社会における価値観転換の必要性

価値観の転換が必要な第一点は、「させてやる（あげる）」から「してもらう」へ、という外国人受け入れに対する姿勢である。

第二点は、外国にルーツを持つ子どもが、日本社会で適切な職業に就き、タックスペイヤーになれるか否かであり、これは今後の日本社会で極めて重要になってくる。

第三点は、留学生などの高度人材の受け入れに関する問題である。上級レベルの日本語能力を有し、かなりの場合、一定水準以上の英語力を持っているにもかかわらず、彼／彼女らが必ずしも希望する職に就けていない現状がある。

「わかりやすい日本語」と国際化

重要なのは、「日本語で」「わかりやすく／論理的に」書いたり話したりできることである。母語で「わかりやすく／論理的に」書いたり話したりできない人が、その思考内容を英語で表現しても「わかりやすく／論理的」になる可能性は極めて低い。

さらに、自動翻訳ソフトの発達により、「わかりやすく／論理的」に書かれた日本語文を入力すれば、かなりの程度「わかりやすく／論理的」な英文が出力されるようになっていることからも、母語である日本語での表現力の向上が一層重要になってきているのである。

「バリアフリー」は誰のため？

「バリアフリー」は「マイノリティであるだれか」のためでなく、「いつかマイノリティになるかもしれない私」のために必要なものと考えられる。「情けは人のためならず」という諺の本来の意味（情けをかけるのは、他人のためではなく、自分自身のためである）こそが「やさしい日本語」の理念を体現しているのである。

T

（詳しくは本文 https://bit.ly/2YToNOC をご覧ください）

執筆者紹介

庵　功雄（いおり　いさお）
一橋大学国際教育交流センター教授

1967 年大阪府生まれ。大阪大学文学研究科修了。博士（文学）。大阪大学文学部助手、一橋大学留学生センター専任講師、准教授などを経て、現在一橋大学国際教育交流センター教授。専門は日本語教育、日本語学。日本語教育の立場から、日本社会における外国人との真の共生社会実現のための言語問題を「やさしい日本語」の観点から考察している。著書は『やさしい日本語』（岩波新書）、『新しい日本語学入門（第２版）』（スリーエーネットワーク）、『留学生と中学生、高校生のための日本史入門』（晃洋書房）他多数。

当財団では、第一線で活動される気鋭の執筆者に依頼し、時代を拓く提案、提言をニュースレターとして発信しています。ご意見をおよせください。

財団事務局 abrighterfuture@theoutlook-foundation.org

一般財団法人 未来を創る財団：http://www.theoutlook-foundation.org/
© 2021 The Outlook Foundation. All rights reserved.